



樋口亜瑞佐

山下浩平

巻頭対談

山下浩平 × 樋口亜瑞佐

Kohei Yamashita

Azusa Higuchi

樋口 実は山下さんのこれまでのご

経歴が、私が憧れる職業はつかりで（笑）。古着屋さんとかデザイナーさんとか、それに絵本作家としてもご活躍されていて。私は本当は芸大や美大に行きたかったんですが、親に反対されて行けなかったんですよ。今日はほかにもいろいろ聞きたいことがいっぱいあるんですが、いいですか？

山下 はい、大丈夫ですよ（笑）

樋口 甲虫がたくさん出てくる『さがそう！マイゴノビートル』（偕成社）もそうですが、生き物が好きですね。最近だと『おばあちゃんとかめ——何げに楽しい2匹とのか

らし』（KADOKAWA）のカメラさんもそうですが、なんでそんな生々しいものに惹かれるんだろうと思って。

山下 それはたぶん「逆張り」というか…。

樋口 逆張り？

山下 54歳になった今も自分の気持ちを言葉にすることを頑張ってるんですが、24歳ぐらいまでは人にうまく気持ちを伝えられなかったんですよ。それで子どもの頃はよく動物園へ行ったり、小学生の頃に2年くらい鹿児島で暮らしていたときは、自然環境がいいところなので毎晩網戸にたくさんのお虫がやって来

て。それがとにかく楽しくて、そこ

から本を読んで、実際に昆虫や爬虫類を飼ってみたいしていました。そんなふうにと人と遊ぶよりは生き物と接している方が好きになって、今があるのはその延長ですね。

樋口 ああ、だから逆張りなんだ。

山下 なんかもそちに逃げちゃったというのがあるかもしれないです。でも、生き物が好きになったきっかけや理由はそれで間違いないですね。

樋口 なるほど。山下さんの描くイラストがまるで本から飛び出してきた感じで、これは実際にじっくり観察して触ったことがある人の絵やなと思ってました。

山下 絵については、何かを描いて「これ、いいね」と誰かが言ってくれたものが仕事になっているみたいな感じです。今は絵の素材になる写真や動画が簡単に手に入るし、僕よりうまくリアルに描ける人はいっぱいいます。僕の場合はそこに自分の想像力をプラスして、生き物を「動いているもの」とか「生きているもの」にしようと思ってるんです。

絵本の読み手に伝わるものをつくらうとしたときに、やっぱり自分が感じていないものは描けないじゃないですか。だからとにかく、いろいろな虫を自分で捕まえに行つて、飼育して、観察して、写真を撮つて、最後に標本にするまでをずっとやって

いたんです。例えば、ナミハンミヨウという美しい虫がいて、意外と身近にいるんだけど、近づくとすぐ、びゅーつと飛んでいくからみんな見えてなくて、そう簡単に捕まえられないんですよ。でもそれを捕まえる

ことによって、絵を描くと臨場感が出る。飼育をしていたら、すごい顎を使って食べるところが見られたり、拡大して写真を撮つたら毛がこんなにあるんだとか、そういうことがわかるんです。そうやって少しでも自分の絵が良くなればと思ってるんですけれど。

樋口 それはすごいですね。私は大

学教員になる前は児童養護施設というところで働いていて、今は主に養育者からの虐待が理由であることが多いのですが、家庭で暮らせなくなった子どもたちと関わってきました。

た。そういう子どもたちの特徴として、自分が好きなものを堂々と好きと言えなかったり、「どうせ自分なんて」と無気力になつていたりする子が多かったんです。山下さんがそういうふう

に自分が好きなことを今まですつと続けてこられたのはどうしてですか？

山下 どうしてなんでしょうね？

(笑) まず僕が出会う子どももつて、例えば昆虫館が主催している「虫捕り教室」に来るような子どもたちなんです。彼らも学校で「虫が好き」とは言えないって言うんですよ。なぜなら、「嫌がられるから」なんだそうです。

樋口 そうなんだ。

山下 でも、その教室に来ると、みんな「虫が好き」って言えるからものすごく生き生きしてるんですね。たぶん「好き」って正のパワー

というか、良いエネルギーだと思うんですよ。そして、みんながそういうふう

に僕自身がそういう子だったので(苦笑)。特に今の時代は多様性が尊重

されているから、その「好き」が少数派でも言いやすい環境にあるのかもしれないけど、「好きと言えなくても君の中に好きな気持ちがあることはわかってるよ」と認めてくれる大人がその子の周りにいるとい

なと思います。

あと、自身のワークショップでよく子どもたちから受ける質問が、「好きなことをして食べていく道を選んだ方がいいのかどうか」なんです。

樋口 その問いは難しいですね。どういうふう

に答えるんですか？

山下 確かに好きなことをして食べていくって大変なんです。でも、どっちにしろ生きていくだけで大変じゃないですか。

樋口 確かに(笑)



紙粘土で作ったハンドメイドのモックアップ。最初にミャクミャクの立体をデザインするとき作成したもの。

樋口 えっ（笑）。でも万博が終わった後も大人気だし、完全にレガシーになっ

大人気キャラが生まれるまで
樋口 それから今日は大変貴重なものを持って来ていただいてますが、そこに見えているミャクミャクについて伺ってもいいですか？ 大阪・関西万博の公式キャラクターとして

たらしいんじゃない？」という話をします。やりたくてもやれない人だってたくさんいると思うんです。僕も学生時代、父に絵の道に進むことを反対されていたんです。それでもずっと続けていたから、絵を描くことが本当に好きだったんでしょうね。

とんでもない人気になりましたね。
山下 ミャクミャクについては、まず先にあの赤い公式ロゴマークがあって、その後に公式キャラクターの一般公募が2021年の末にあっただんです。それまで公募には一度も参加したことがなかったのですが、関西の万博だし、僕は神戸に育ててもらったし、あと学生の頃から「太陽の塔」が好きでよく見に行っていたこともあって出してみたいですよ。そうしたらいろんな選考を経て、最終的になぜか僕の案に決まっただけで、そこから1年くらいかけていろんなポーズを描いたり、デザインガイドの制作や着ぐるみの設計なんかに携わりました。そういう仕事を2023年の春頃までに納めて、僕の中ではそれで終わったという感じでした。

樋口 えっ（笑）。でも万博が終わった後も大人気だし、完全にレガシーになっ
山下 実は普段東京にいて、このキャラに触れる機会が少ないんですよ。だから実際に万博の会場で、自分が描いたミャクミャクがいっぱい使われていてびっくりしたという（笑）。だから2025年に人気が出でどこか不思議な気持ちです。最初は「気持ち悪い」という反応もあったけど、みんなが求めている満点が必ず取れることなんてないですし、デザインやアートの世界でインパクトや驚きを与えたりすることは重要だし。そういう意味では元々あの公式ロゴにインパクトがありました。僕はコンセプトを考えて、公式ロゴマークを少しアレンジして頭に付けて、そこに体やしずくを付けて「生きている」キャラクターにしたいだけ。ただ、口の形や表情、動きにはものすごくこだわっています。デジタルっぽく見せたくなくて、アシンメトリック（左右非対称）を強く意識して、「生の線」を感じてもらえ

るように何度も描き直しました。立体にする際の形状にも、丸みを加えたりして可愛さや動きが出るように細部までこだわりましたね。
樋口 それはなぜなんですか？
山下 なぜかと言うと、そうしないと生き物にならないんですよ。
樋口 なるほど、それが最初の話に繋がるわけですね。ミャクミャクが人の心を捉える理由がわかりました。

AIとどう付き合うか

山下 ただ、僕はデジタルを全然否定するつもりはなくて、2000年から2015年くらいまではずっとパソコンを使って絵を描いていたんだけど、そこから少しずつ離れちゃったんですね。今はAIが台頭してきて、すでに「道具」というレベルを超えつつあるように感じますが、今のところ生成AIには触れたことがありません。YouTubeやTikTokもほとんど観ないんです。これはあくまで僕に関してですが、絵を描くのが楽しくてこの仕事を選

んでいるので「自分で描かないでどうするの?」としか思えないというか。仕事の打ち合わせや事務作業にしても、それはあくまで好きな絵を描くためにしなきゃいけないことで、とにかく1日の中で描く時間を増やすためにそのほかのことは必死でぎゅーっと詰めてやっています。どうしても絵が描けない日があったりすると我慢できなくて、時間を死守してなんとか描こうとしますね。例えば水彩絵の具をボタツと垂らした「にじみ」とかって、今ならある程度はデジタル化できると思うんだけど、でもそれってあくまでデータの集積じゃないですか。

樋口 ああ、そうですね。

山下 それよりもっと偶然的な産物みたいなものの、たぶん生命の起源とかがって絶対そういうところにあると思うんですが、そういうものを何か数値化しようというよりは、むしろくちや小さなことからでいいので、自分の周りに実際に起こった偶然や奇跡を集めて、そこから何かを形にした方が面白いんじゃないかと思うんですよね。

樋口 そういう考えを持っていってくださる大人に出会える子は救われると思うんですけど、出会えない子にはなかなか難しいんですね。最近だと相談相手はAIっていう子も多いです。今日着ていく服に悩んだらAIに聞くとか、パートナーについての相談とか。何かそういうことが当たり前の時代の中で、でも人間が生きていく上で大事なことが、必要な体験ってやっぱりあるような気がします。

山下 僕もそうなんですが、人間って否定されるのが怖いじゃないですか。

樋口 はい。

山下 だからAIに聞く気持ちもすごいわかるし、僕だって人と接していて嫌な思いをすることもある。特に今の若い人たちは、子どもの頃の貴重な時間にコロナ禍を経験して、一方ですごく簡単に匿名で生きることができる世の中になっていて。その中で道具としてのAIみたいなものは必要だけれども、やっぱりそれだけではダメで。とても複雑な世界を生きたいといけない。そんな中、

絵を描くのにしても文章を書くのにしても、みんなある意味同じ道具を、同じソフトを使っている状況に進んでいくことに、僕はどこかで違和感みたいなものを感じています。原稿用紙にペンで書く方が向いている子もいるはずだし、物事にはいろんなアプローチがあった方がいいと思うし、もし興味があつたら「やってみたい」と言ってあげたい。ちょっと調べて終わっちゃうのはもったいないですよ。

樋口 そうそう。ちょっと調べてそれでわかった気になっちゃう。

山下 身を持って知るには時間やお金もかかるし、AIはそれらしい答えを出してくれるけど、そうじゃなくて興味がああると思うたらずやれるというのは、若い人の特権だとは思いますがね。

樋口 確かに若いときって時間はありますからね。お金はないかもですけど。

山下 時間って本当は一番価値があるものだから。僕も大人になってわかりました(笑)

絵本が持つチカラ

樋口 ここで少し絵本のことを聞きたいのですが、『きょうりゅうゆうえんち』(ポプラ社)は恐竜が大好きな少年がある日、恐竜だらけの遊園地に招待される話で、これは心理学を学ぶときの教材のヒントになると思うんです。主人公の男の子が最初は悶々としてて、そんな彼が遊園地に行っているいろんな体験をして、帰ってきたらちよつと大人になっているという成長の物語ですよ。



右『ミyakumiyakuと…ミyakumiyaku誕生ものがたり』(フェリシモ)
左『きょうりゅうゆうえんち』ダイノ・ロポでサファリたんけん! (ポプラ社)

山下 そういふふうにしつかり読ん

でもらえると思わくちや嬉しいで

すね。絵本自体がこの先なくなるこ

とはないと思うんですが、まずは「面

白いもの」として読者に届けたいと

スマホやタブレットに代わられちゃ

いますよね。この本は単純にまず、

通常の絵本よりも大判で、タブレッ

トより大きいんですよ。絵本のすご

いところは、映画や小説だと3回で

も観たり読んだりしたら多いねって

なるけど、絵本って何回も読んでも

らえるチャンスがあるじゃないです

か。でも、一度読んで全てがわかっ

ね。実際に本のページの間に招待状

の紙が挟まっているのは見たこと

がないです。

山下 こういったアナログでしかで

きないアイデアを日頃ずっと考えて

いるんです。この絵本の感想の中で

特に嬉しかったのが、「こんなに恐

竜が好きなのに、なんで僕には招待

状が届かないの？」というものでし

た。この招待状はファンタジーの世

界から現実世界へのプレゼントとも

言えるし、物語の中でも主人公がい

る世界から別の世界へ行くための装

置として、いい意味での「うそ」な

ね。

山下 まあ意外と簡単に言っちゃう

んですけど（笑）

樋口 いや、でもこれってすごく心

が育った経過が描かれているんです

よ。変化のすごさがここに詰まっ

ているというか。「りゅう君はどうし

て友だちに謝れたのか」を考えるこ

とは、心のことを学ぶ教材としてす

ごく素敵だと思ったんです。

山下 ありがとうございます。あと、

今は「伏線回収」というものがある

すごく流行ってますよね。その伏線

が回収される気持ち良さは間違いな

きではあるんですよ。だけど、読み

進めたストーリーの果てに、いくつ

かの答えみたいなものが想像でき

て、「これってどういう意味なんだ

ろう?」と少し立ち止まって考える。

さすがに昔のフランス映画のように

難解だと子どもはついて来られない

けど、後から考えたり振り返ったり

できる「余白」をつくっておくこと

が、僕は自分の絵本に関してはい

と思っています。まずは何度も楽し

んでもらえる、純度の高いもの、熱

量の高いものを自分なりに生み出さ

ないと生き残れない。僕は今50代だ

たいつてことや、将来のビジョンの
ようなものってありますか？

山下 先のことは特に計算はしてな
くて、今日やることと1週間やる
こと、その先の1年でやることと10
年でやることぐらいを考えながら仕
事をしている感じです。要は自分
がイメージした以上のことにはなら
ないと思っていて、なりたいたい自分と
か、こうなったらいいなとかって、
やっぱり自分でつくっていかなくて
ばならないと思うんですよ。生きて
いくのってそんなに甘くなくて、ま
ず食べられることが大事で、そして
人間関係やらいろんなことが大変だ
から(笑)。とにかく自分の頭の中
にあるやりたいことの中から本当に
やりたいことをイメージするように
しています。一つ決めていることは、
絵を描いて食べていくということだ
す。それを可能な限り絵本で、でも
それだって読んでくださる方がいな
いと続けられないですからね。

樋口さんは普段、大学で教えてい
るわけですが、授業に魅力があるの
か、先生に魅力があるのか、そうい
うことがないと学生が続かないです



よね。

樋口 はい、続かないですね(苦笑)。
例えば、「心の仕組みはこうなっ
てます」「メカニズムはこうです」と
いう結論だけではダメで、そこま
でのプロセスが面白くなっていない
と、人は学ぼうとしないという苦労
はありますね。

山下 全体の中で自分が一番伝えた
い内容と、それを聞いてもらえるよ
うな仕掛け。それを「仕掛け」と呼
んだらあまりよくないかもしれない
けど、やっぱり興味を持ってもら

ことが大事で、たぶん先生のような
人に教える仕事ってそれが一番だと
思うんです。僕なんかでも最近思う
のは、ちゃんと若い人に伝わるよう
にしなればいけないということだ
すね。僕の中に学んでももらえるよ
うなものもあれば、それは次の世
代に伝えなければいけないのか
と。絵本でもデザインでも何かを伝
えるためにやっているわけで、要す
るに思いが伝わらないとダメなわけ
じゃないですか。それって世界中が
同じ方向に向きがちな今という時代
の中で、すごく難しいことだと思っ
ています。

樋口 私は絵本やデザインのような
何かしらの作品の拡がりって、人と
人が繋がり合ってこそだと思っ
んですけど、でもやっぱり作品自体に力
がないと、人も繋がっていない気が
するんです。そのあたりの加減と
いうか、ある程度クオリティの高い
ものを商業ベースで続けていく
ことについて意識していることって
ありますか？

山下 言葉にすると本当に格好悪い
と思うんですが、もうとにかく魂を

込めて描くという、ただそれだけで
と思っています。もう10年以上前にな
りますが、『ばななせんせい』(童心
社)という絵本の絵を描くことにな
って、文は得田之久先生という当
時70歳代の大ベテランの先生だった
んです。それはそれは素晴らしい
文章で、でもそれに絵を描くのがと
ても難しくて。つまり文章はイメー
ジを伝えるものなんだけど、絵は完
全にできあがった形を届けなくてだ
めなんです。そのイメージと完成
形の間に埋めるのが僕の仕事で、そ
れは面白いことでもあるんですが、
当時の僕は力がなくて、その難題に
頭を抱えることになりました。それ
で必死になって考えて、それこそ
100通り描いて、何度も何度もリ
メイクを受けながら1つを選んでい
くわけですが、僕にとって「魂を込
める」ってそういうことなんです
よ。そういうことを続けていると、
最近ちょっとだけわかってきたの
が、僕は決して自分の腕がいいとは思
っていないんだけど、それでも線
に神が宿る瞬間があるというか、そ
ういうことが起こるわけです。うま

い絵を描くことを昔は追求していたんですが、うまい絵はうまい絵ですごいんだけど、いい絵を描くとなるとそれは数値化できなくて。少なくとも僕の場合は描き続けていないとそこには到達できないと思ってます。きつとそこから出てくるのが個性で、その個性を磨くためにはまず続けていないとダメだし。そういう意味ではここまで続けてこられてよかったなと思ってます。

樋口 これまで「うまい」と「いい」の違いをあんまり考えたことがなかったです。

山下 大人はまず「うまい絵」に惹かれるんですよ。ところが子どもは「うまい絵」より、自分にとっての「いい絵」が好きなんです。先ほど言ったように頑張って描いた『ぼななせんせい』はちゃんとそれなりの結果も出たんです。自画自賛ですが今見ても可愛くていい絵だなって思います(笑)。そういうものにきちんと反応してくれる子どもたちが、本当はすごいんですよ。

樋口 ミヤクミヤクも子どもに大人気ですよ。やっぱりあれだけみんな

なが知っているキャラクターをデザインされた方に、自分が生きているうちに出会えたことに今改めて感謝しています。

山下 いえいえ、とんでもないです。ミヤクミヤクについては、与えられた課題の中である種の正解を導くことができたと思っています。最初は奇抜で伝わらなかったかもしれないけれども、最後はやっぱり絵の力だと思いが伝わったのかなという感じです。ミヤクミヤクは自分のキャラクターデザインの仕事の中で、あ



る種の到達点だと感じますが、今度はおもつと自分だけのイメージやメッセージを使って、何か伝えるものを生み出さなければならぬですね。やっぱり大阪・関西万博のキャラクターだからみんなに知ってもらったというのは間違いないで、僕が1人で何かやったところでこれだけ知ってもらえることはないですから。

ただ、子どもに好かれる、みんなに愛されるキャラクターになったことはとても嬉しいですね。でも流行は早いから、そのうち別の人気キャラが出てきてみんなそっちに流れていくんだろうけど。ミヤクミヤクも心のどこかに残ってくれたらいいなと思います。

そういえば、この前友人と居酒屋で呑んでいたら、後ろの席から「ミヤクミヤクってなんで売れたんだろうね」と大きな話し声が聞こえてきたんですよ。おそらく関係した企業の方々のようでしたけど。

樋口 (苦笑) そんなことがあるんですよ。

山下 僕は黙ってそれを聞きながら「それは魂を込めたからだよ」と心

の中で思っていました(笑)

樋口 私は児童福祉の仕事をしていた関連で里親家庭や制度に関する絵本(『どうして?—あたらしいおうち—』)をつくったことあるんですね。今、里親制度は様々な点で動いて来ていて、社会的養護において子どもを施設に入れるよりも里親さんに委託するというプランが推し進められているんですが、まだまだ海外と比較すると里親さんの認知度が低くて…。もつと里親家庭を世間一般に知ってほしいな、何か力になれるかなと考えて。それで文章にするよりも絵本の形にする方が読んでもらいやすくていいかも思ってたんです。ただ、自分でストーリーは書けても絵は描けないので、イラストを描ける方に依頼して絵の力を借りようとしたんですが、さっきも山下さんにおっしゃってみたいのに、そこにはイラストレーターさんにとつての生みの苦しみがあった。それって魂を込めてやってくれるからこそなのだなと感じました。

山下 今も世界の国々では戦争が起



こつていたりして、その中で日本は平和だと言われるポジションに位置づけられていると思うんですよ。

樋口 平和じゃないとなかなか万博はできないですもんね。

山下 例えば、僕らの親の世代は戦争を経験しているけど、自分たちはしていない。でも僕は神戸で震災を経験したので、明日起きたときに大好きな街が壊れてしまうということや、絵を描くことすらできない時期があつて、そこでやりたいことをやれない辛い経験から好きなことをやる幸せを学んだんです。そうした

ことが今の自分の原動力になっているんですね。毎日好きなことをやるにはどうしたらいいのかという考えの下に生きていて、でも実際はそう簡単にはいかないんですけど。だからこそ、自分は本当は何が好きなんだということを探索しなければならぬんですよ。よく「〇〇が好きでやってみたいんだけどなあ」というのはみんな言うじゃないですか。

樋口 言いますね。

山下 でもなかなか始められないですよ。

樋口 その考えは、やっぱり震災というぎりぎりの体験の中で、やりたいたいと思つたらすぐやっておいた方がいいと思つたということですよ。今のお話はかなりそれと地続きな気がします。

山下 そうですね。本当に、毎晩そう思ってますよ。

樋口 毎晩ですか？

山下 日本は地震も多いし、明日はもうできないかもしれないって本当にいつも思いますよ。明日これが描けないんだつたら、今日描いておかなければって。

樋口 それだと寝られないですね（笑）

山下 だから仕事ばかりしていません（笑）。まったく自慢にはならないのですが1年に数日休むくらいで、朝起きてから夜中の2時くらいまでずっと何か描いたり作ったりしています。きつとそれだけ好きなんですね。

樋口 すごいですね。「好き」を超えている気がしますけど。「好き」の向こう側みたいな。

山下 いや、だからたまに休む努力もしたりして、この前は旅行で福井の恐竜博物館に行つて、縄文遺跡にも寄つて、その道中で虫を探してました。もちろん家族に気を遣いながらですよ（笑）

樋口 うんうん、子どもの夏休みみたいな。

山下 そういう時間の中から次のアイデアが生まれてくるのがまた不思議なんですよ。

山下浩平（やました・こうへい）

デザイナー・絵本作家。1971年熊本生まれ、神戸育ち。大阪芸術大学美術学科卒業。グラフィックやキャラクターを中心としたデザイン制作をおこないつつ、絵本や児童書などの創作をおこなっている。『ちびワくん』（ほるぷ出版）、『ミヤクミヤクとミヤク誕生ものがたり』（フェリシモ）など著作多数。2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）公式キャラクターデザイン最優秀賞受賞。ミヤクミヤクの作者としてデザインやイラストレーションなどを制作。プロフィールや着ぐるみの設計にも携わる。

樋口亜瑞佐（ひぐち・あずさ）

大阪公立大学現代システム科学研究院准教授。博士（人間科学）。臨床心理士、公認心理師。社会的養護における心理支援を専門とし、被虐待児の遊戯療法（プレイセラピー）や社会的養護経験者のアフターケアの臨床実践や研究に従事するほか、セクシュアル・マイノリティ当事者および家族支援、調査活動等も行っている。主な著書に『施設で暮らす子どもの生活と育ちを支えるケアワーカー——子どものケアとセルフケアのために』（福村出版、2025、共著）、『どうして？——あたらしいおうちにいくまでのおはなし』（遠見書房、2022、単著）等。児童養護施設心理職、愛知教育大学准教授を経て、2024年4月より現職。